

## ★★1学期Ⅰ期・4月～5月上旬

### 教育課程(指導計画)★★



#### <年少・れんげ>

4月、いつも一緒にいた養育者（母親）から離れまた進級して、新しい先生、新しい友達の中での園生活が始まります。「幼稚園教育要領の総則第1 幼児教育の基本」にも表されているとおり幼児教育を行っていくのにあたって「教師は、幼児との信頼関係を十分に築き…」とあります。これを具体化した姿「子どもたちが『先生大好き』と言ってくれる関係」をつくることでもあります。

登園を渋ったり泣いてしまう子、園生活の見通しがつかず不安になる子、どんな子どもの姿も保育者はまず、まるごと全て受け入れます。それは「だっこ」という行為で表されたりします。保育者に温かく見守られ、ありのままの姿を認められていると感じるからこそ、安心して十分に自己を発揮することができます。

自分は先生に見守られていると感じた子どもたちは、自分から興味や関心のあるヒト・モノ・コトを見つけ安心してあそぶ姿が出てきます。自分のあそびたい場所で



やりたいあそびが十分にできるよう保育者は、子どものあそびをなるべく制限しないで、子どものあそびを肯定的に受け入れていきます。これにより自己肯定感や集中力が育っていきます。また、みんなと大好きな先生と一緒にリズムあそび・ごっこあそび・模倣あそびをすることで、集団であそぶことの楽しさや喜びを感じ、クラスの一員であることを感じていきます。これが社会所属感（自分の居場所があるという感覚）につながっていきます。

園生活の1日の流れ、たとえば、自由あそびからかたづけ、トイレ、設定あそび、帰りの支度などのひとつひとつのことが子どもたちにとって楽しいと感じられようにあそびにしていったり、時には、保育者の指示を受け入れるように関わりそれを受け入れた姿を褒め認めしていくことで、身辺自立や生活リズムが成立していきます。その中で、3歳児なりに集団生活のマナー、ルールに気づいたり、他の子どもへの関心も出てきます。このように4月は、園生活（社会生活）における、必要な習慣や態度を身につける為には何よりも、保育者との愛着関係を築くことの重要性を意識しながら、子どもたちと関わっていきます。



#### <年中・たんぼぼ>

4月、年少から年中へと進級し新しい先生、新しいお友達と園生活が始まります。新しい環境の中で たんぼぼの生活の流れを保育者が提案したり、促していく中で子どもが選択し行動していく事が活動のメインとなっていきます。まず、保育者は子どもが自発的に生活を組み立てていく姿（ロッカーの使い方、その他の部屋の物の使い方）を受けとめるとともに、進級した喜びを子どもと一緒に共感していきます。そうすることで担任との関係を結んでいきます。

さらに、進級してすぐの活動は担任との「勝負あそび」を仕掛けていきます。ゲームや競争など、勝ち負け通して「この先生とあそぶと楽しい」という思いの中で愛着関係を深めていきます。そのために保育者はわざと負けたり、大げさに悔しがったりします。しかし、「負けるのはイヤなこと」という負け目ことを受け入れることが難しい段階なので、最終的には先生の負けで終わるようにしますが、少しずつ、悔しがることを楽しむことを通して、負の自分も受け入れられるようにしていきます。こういったことは、すべて、子どもと先生との愛着関係を築くことにつながっていきます。



環境設定としては、各クラスに子どもが見たら作る手順が分かる物（経験した製作物など）また、とりかかりやすい素材を設定し子どもが必要とする素材を提供できるような位置に保育者が立ちながら、保育者は子どもの欲求を受け入れ、子どもの気持ちに共感したり、クラス全体に広がるように言葉かけをしていきます。ひとりの子どもの、作りたいものを作る、やりたいことをやるというささやかな自己実現が、クラスみんなにも広がっていくというダイナミックな動きを感じるチャンスをつくれるようにしていきたいです。



#### <年長・すみれ>

4月の年長が始まった子どもたちは、これまでの経験から年長すみれの生活をどう組み立てていくかの知恵をつけています。ロッカーの使い方から部屋の共有スペースの使い方、キャプテンという当番、お弁当箱洗いなどについて、子どもたちの不便さや子どもによって違う行動などが出てくる場面場面で、保育者は、子どもたちに見通しを持てるように助言しながら何が困ったことなのか？どうすればいいのか？誰がするのか？いつやるのか？を自分たちで話し合いをし、自分たちで決めた！という意識が持てるように進めます。

すみれになると新しい環境としての画材や道具類があります。そのものがどんなモノであるのか試したくなる環境でもあります。マジック・鉛筆クレヨンでは「新しい画材に触れ、その画材の特性に気づく」ことでしょう。また、道具の使い方などを保育者が教えてしまうのではなく、子どもに任せてみることもしていきます。新しいモノとのふれあいで、自発、主体的にあそびを展開し「これがこうなった！」という情報発信と受信による子どもたちの結びつき(共感)も多く出てくることは、今後のクラスづくりにもつながってきます。

新年度という新しい環境は、年長のすみれさんにとって自分のクラスのことだけではなく、園全体が新しくなったことを感じる力もあります。そこで自分が、何かの役に立ちたいという思い（社会意識）から、他学年の先生のお手伝いなども積極的にし始めます。園生活の中で、クラス以外の状況を感じ「困ったことになっているのかな？」「役に立つことはないかな？」というところで、子どもたちと保育者が共感し合うことも大切になってきます。

